



# 用瀬町余井古墳調査報告書

— 用瀬地区第二次農業構造改善  
事業ほ場整備に伴う調査 —

1979.3

鳥取県八頭郡用瀬町教育委員会

## 目 次

はじめに	1
余井古墳付近県立博物館定点航空写真	2
I 調査の目的	3
II 位 置	3
イ 用瀬町遺跡の歴史的環境図	4
ロ 余井古墳付近図	5
ハ 遺跡付近の地形	6
ニ 余井古墳周辺の新旧圃場図	8
III 古墳の位置と歴史的背景	9
IV 調査の経過	10
A 遺 構	11
イ 余井古墳実測図	11
ロ 余井古墳断面図	13
ハ 余井古墳展開及石室内状況見取図	15
ニ ほ場整備前後の余井古墳付近写真	17
B 遺 物	18
イ 土 器	18
1 石室内より出土の土器	18
2 鉄 器	29
3 装 身 具	30
ロ 周溝よりの出土品	31
ハ 周辺よりの出土品	31
写 真 版	
土 器	33
鉄 器	37
ま と め	40
あ と が き	



## はじめに

鳥取県八頭郡用瀬町は農林水産省補助事業として昭和53年7月15日第2次農業構造改善事業ほ場整備美成工区の作業を開始した。この地域の一部に、明治年間、墓地であったと伝えられる一枚の畑があったが、現在は一面の水田で、この地内に古墳の存在など何人も予想してはいなかった。工事を請負った郡家建設株式会社はブルドーザーによる、この水田の掘り起し、地ならしの作業中、8月7日突然、水田地表下約60cmに古墳の石室の一角らしき大型の花崗岩に衝き当たった。

この作業は米作水田のほ場整備工事なるため、冬季の積雪を考慮し53年12月中に整地を完了する必要にせまられていた。県教育委員会の強力なご指導により、所定の手続きを行ない、文化庁の発掘許可を得て、県文化課主任、森田純一氏のご指導のもと、町職員、町文化財保護審議会委員等の協力により、記録保存のための発掘調査を8月28日より9月30日まで実施した。専門的技術者を持たないため、調査に予想外の日数を要し、次いで出土品の整理と報告書の作成に専念した。本町には古墳などの埋蔵文化財は極めて少なく、この度の発見は町の文化遺産として貴重なものであるに鑑み、出土の鉄器15点は総て、奈良県、文化財保存処理センターに持参して処理を依頼し、昭和54年7月処理完了の見込みである。なお古墳は町福祉センター附近の適当な地に、これを復元して長く保存する計画である。

調査報告書の発刊にあたり、経緯の一端を記すと共に、ご指導とご協力を賜った各位に感謝し厚くお礼を申し上げます次第であります。

昭和54年3月

用瀬町教育委員会教育長

谷 本 威



余井古墳付近県立博物館定点航空写真（2万分の1）（1963年）

## I 調査の目的

用瀬町における古墳は極めて少ない。現在までに分明してるものは次のようである。

○ 鷹狩1号墳（円墳）

昭和24年頃、図の耕作者によって、2枚の高低差1m余あったものを、1枚の田に転換した時発掘され、現在は石室の側壁の川石と、出土した須恵器若干が残っている。

○ 鷹狩2号墳（円墳）

1号墳東方約150m余りの田の中にある。未発掘

○ 別府古墳（円墳）

昭和31年 用瀬中学校建設のため破壊され、現在校庭の一部分となっている。須恵器の壺1土師器の小型頸壺1が残っている。

○ 古用瀬1号墳

昭和30年 梨園に造成した時破壊、須恵器の土器10数点、耳飾り、刀などが発見されたが、散逸し、現在何も残っていない。

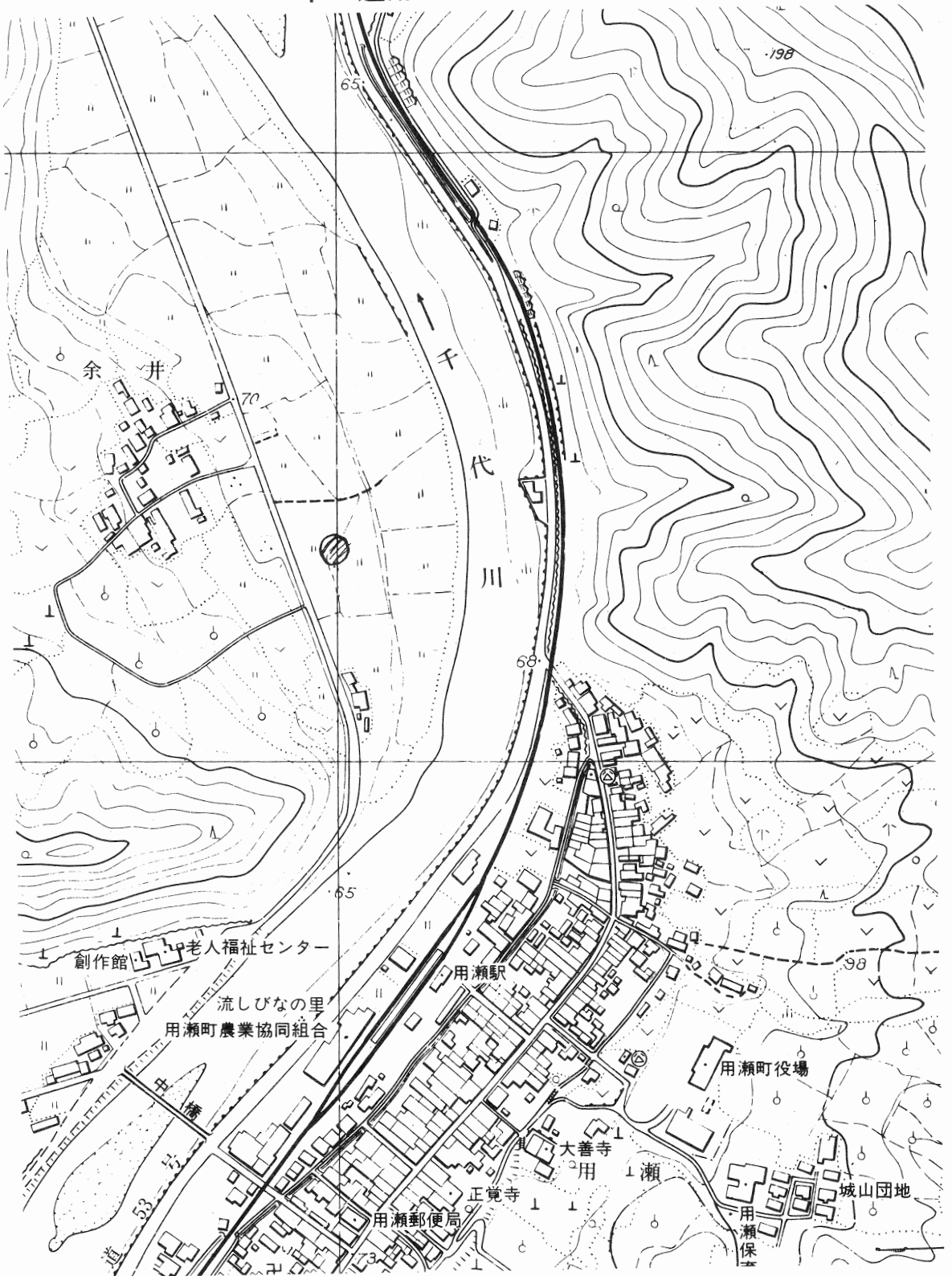
概要以上のような状態にあったところに、昭和53年8月、用瀬地区第2次農業構造改善事業圃場整備事業美成工区の事業が開始され、大字美成字吹出168番地に古墳があることが分かったので、数少ない本町の古墳の事として、その保存方を願ったがかなわず、詳細に調査して記録として保存することとした。

## II 位 置

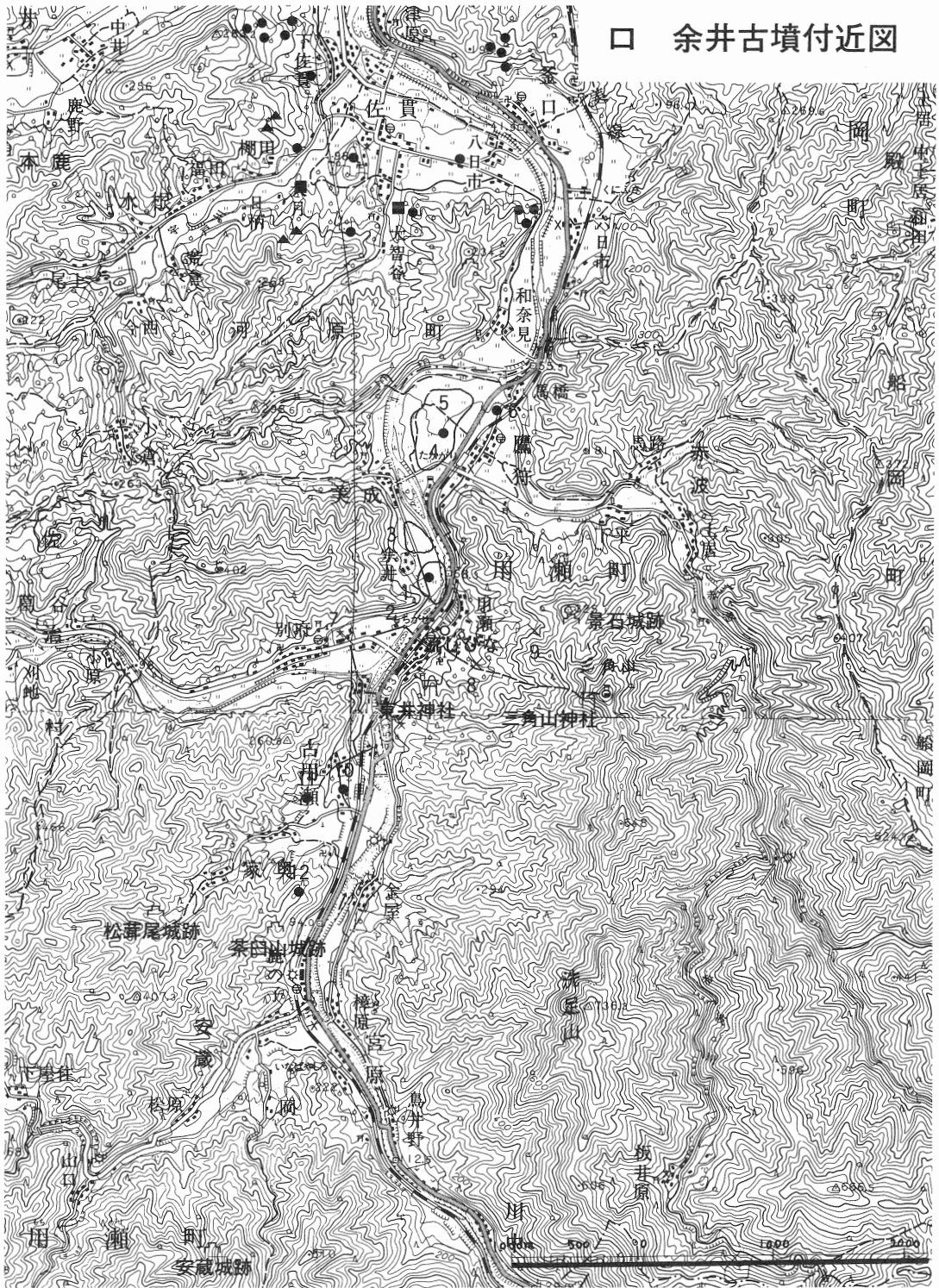
余井古墳は、用瀬町大字美成字吹出168番地に発見された。ここは明治末年頃田に転換された所で、高低差2mの畝畔よりの上の田にあり、余井部落東南約150m、千代川より約100mの段丘上にある。余井田圃全体より見ると、比較的狭い南方にかたよった所である。

交通上から見ると、大化の改新後に設けられたと考えられる、上方往来の対岸に位していて、交通の要衝ではなかった。しかし上方往来と連絡し、宿場の役割をつとめた用瀬への連絡路として江戸時代からは、この古墳の50m余の北側に、用瀬の渡しが設けられ、美成や余井の人は勿論、小倉や散岐の人達が利用していたものである。

# イ 遺跡の歴史的環境図



## □ 余井古墳付近図



- |  |   |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 余井古墳(須恵、土師、高貝、鎌、金環、鉄鍬、鉄刀)</li> <li>3. 美成遺跡(土師、須恵)</li> <li>5. 鷹狩遺跡(縄文、弥生、土師、中世、石斧)</li> <li>7. 用瀬中学校遺跡(別府)(須恵)</li> <li>9. 権内屋敷遺跡(須恵)</li> <li>11. 古用瀬2号墳(須恵、馬具、鉄刀)</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>2. 余井遺跡(縄文、弥生、土師、須恵)</li> <li>4. 鷹狩1号墳(須恵、鉄刀、切子玉、勾玉)</li> <li>6. 鷹狩2号墳</li> <li>8. 十文字遺跡(須恵)</li> <li>10. 古用瀬1号墳(鉄刀、金環、須恵)</li> <li>12. 東光寺山経家(須恵、土師、銅経筒、鉄経筒)</li> </ol> |
|--|---|



## ハ 遺跡付近の地形

千代川中流にあたるこの地は、東西を中生代白亜紀の花崗岩（用瀬花崗岩）の急崖により挟まれ、谷底平野の幅が最少で約200mとなる地域である。

現河床には、亜角礫から亜円礫の中、粗、大礫が堆積すると同時に、基盤岩も露出する。基盤岩が河床より露出するのは、用瀬より約2km下流の和奈見橋付近が最初であり、これより下流では見られない。

段丘が見分けられるのは、河口より約900mの源太橋付近より上流域であり、それも山麓に付着する如く分布する。

大山中部火山灰層である倉吉バミスが河床に見られるのは、河原橋左岸の丘陵地に明瞭であるが、用瀬小学校のある標高約100mの丘陵にも分布する。そして黒ボクと判断できるものは、中位段丘面の地表下約2mにあり、この濃褐色土層の層厚は、鷹狩付近で30cm以上ある事が確認できる。

余井古墳の位置は、河口より約25kmの千代川左岸、標高約70m、河床との比高約9mの中位段丘上に位置する。

鷹狩1号墳は、中位段丘の侵食段丘である低位段丘（I-a）上に位置し、鷹狩2号墳は中位段丘（I-b）に位置するので、本報告では中位段丘について若干触れておく。（地形分類図参照）

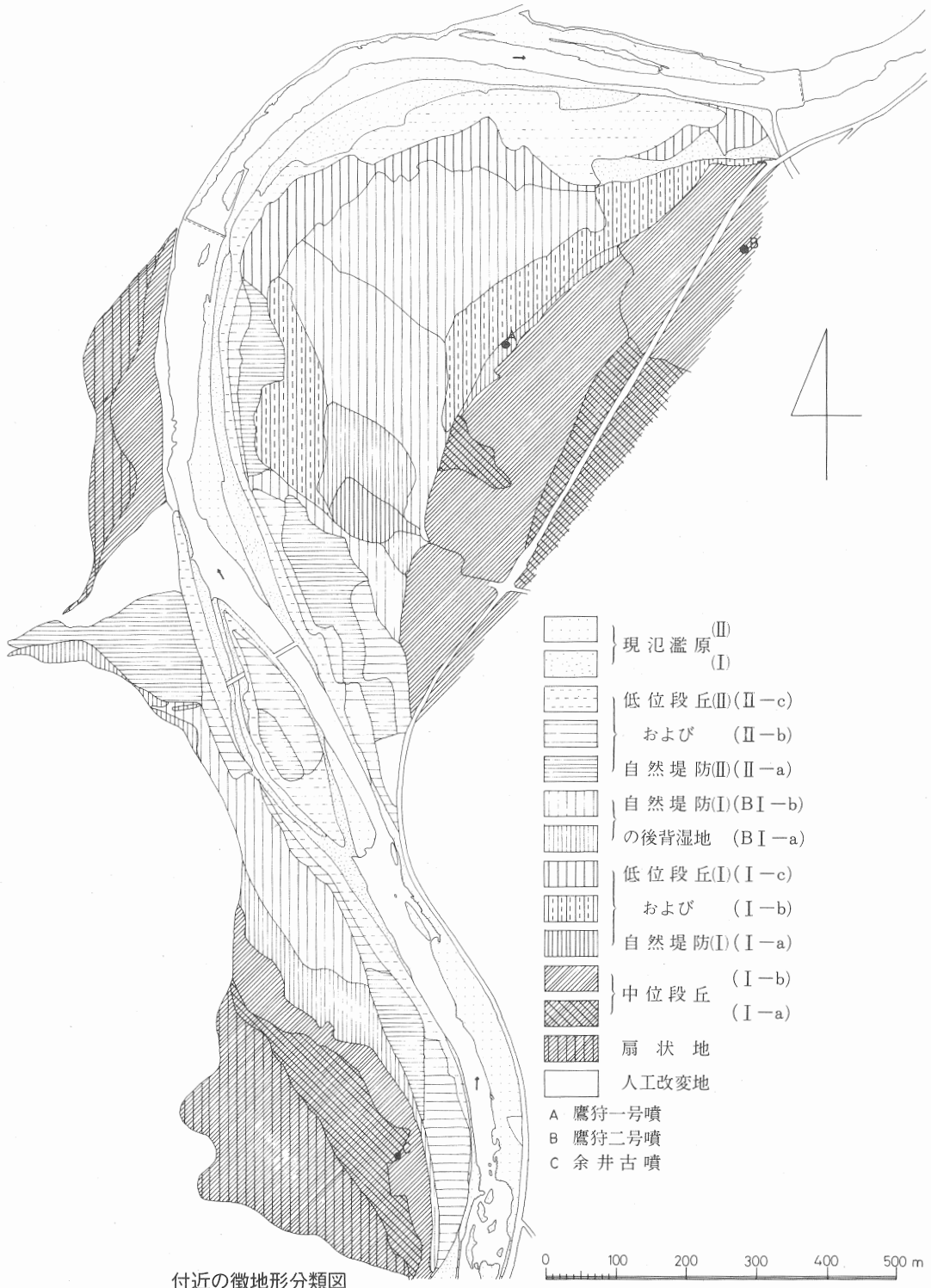
中位段丘は河床との比高約9m、低位段丘（I）との比高約1～2mであり、地表下約2mに濃黒褐色の黒ボク（黒泥土層）をもつ事を特色とする。ほ場整備後で確認出来なかったが、余井古墳下位の中位段丘（I-b）より縄文土器、弥生土器が余井古墳に隣接して出土した事もこれを裏付けるものである。

鷹狩の中位段丘（I-b）では、黒ボク土層の直上に扇状地性とも言える亜角礫（平均粒径6cm）を散在させる層厚1～2mの茶褐色弱粘質土層がのり、層厚は上流へ向って厚くなり、相当の勾配をもつ。（黒ボク土層中にも粒径2cm程度の亜円礫が点在するが、黒ボク土層堆積後に千代川の堆積作用が急激に増大した事を示している）茶褐色弱粘質土層の上部は平均粒径2cmの亜角礫から亜円礫層（層厚20cm）となり、その上位には花崗岩を母材とした小礫散在粗粒淡黄褐色砂層が約1mの層厚でのり、これが中位段丘（I-a）へと連続する。低位段丘（I-a、I-b）には黒ボクより上位層の亜角礫を散在させる茶褐色弱粘質土層が見られずその為低位段丘は侵食段丘であると思える。

濃黒褐色土層は淡黒褐色土層（層厚約90cm）へ漸移し、最下部はローム質黄褐色砂層（層厚不明）となる。

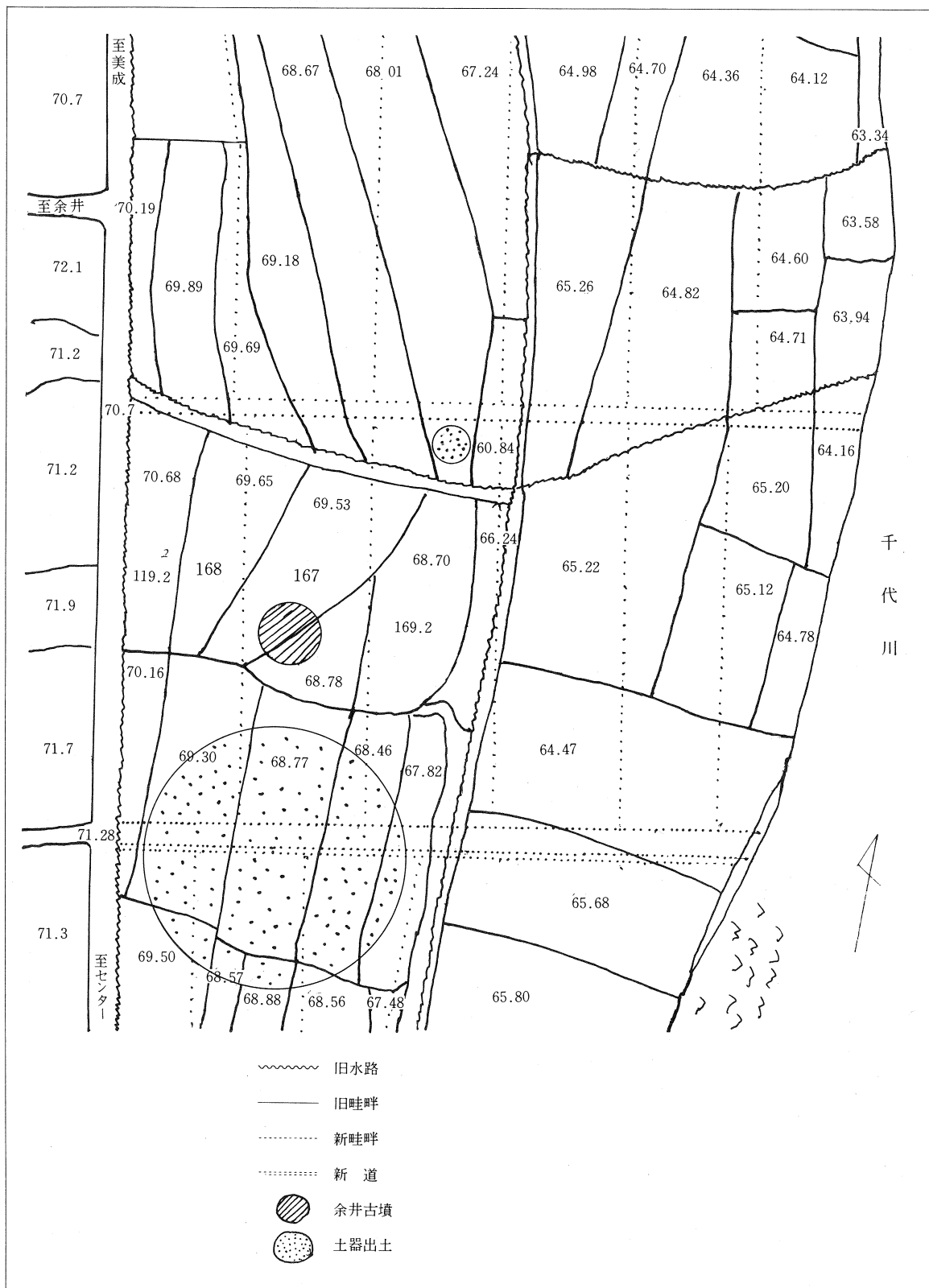
昔、鷹狩平野で『下の宮』と呼ばれる所があったらしいが、この平野の低位段丘（I）および

自然堤防(I)の面では須恵器の散布しているのが確認できる。又、その遺物包含層は地表下55～68cmくらいと思える。



付近の微地形分類図

## 二 余井古墳付近の新旧圃場図



### Ⅲ 古墳の位置と歴史的環境

八頭郡用瀬町美成字吹出168番地に所在し余井集落に近接することから余井古墳と名づけた。

中国山地の県境から源を発した千代川が、智頭町、用瀬町的高峰峻嶺の間を蛇行し、北進しながら日本海へ注ぐ。古墳の位置は、千代川中流域の河岸段丘上の標高70mの水田面に築造され、現在の美成集落の南南東700m、余井集落の東150m、千代川西岸より100m、対岸の用瀬駅より400mにある。

「美成」は、「倭名抄」に因幡7郡50郷の中に「美成郷」の記載があり、因幡国智頭郡美成郷であり、現在の用瀬町全域と考えられている。したがって、このあたりは、町内で最も古くから集落して発展し、中心的な位置を占めていたものと考えられる。

古墳等の町内全体の遺跡は極めて少なく、原始、古代人の生活環境にはあまり適しないと考えられていた。それは、現在でも山林の占める割合は91.7%と多く、急峻な山地と少ない平地のためである。

ところが、この度の余井古墳発見の動機となった水田の第2次農業構造改善事業ほ場整備(昭和53年度事業)は、単に点としての余井古墳の発見ではなく、暗黒色腐植土層等に遺物を包含する面としての遺跡や集落跡の存在を十分にうかがわせる結果となった。そして、遺物散布地としての遺跡は、工事の範囲拡大とともに、広がりを見せてきた。

遺跡は、広範で、余井遺跡、美成遺跡、鷹狩遺跡に及び、年代的にも縄文後期から、中世に至る遺物が小学生等の手により発見され集取されたのである。

用瀬町の人類とかがわる歴史のれい命が、古墳時代と考えていたのが、一躍縄文時代後、晩期に逆のぼり得ることが、数10点の土器から教えられることとなった。

しかし、残念ながら、工事はすでに進行し、切土部の遺跡の大半は消滅し、何ら調査のすべもなく、遺物散布地としての姿が目にとまるのみで、くやんでもあまりある結果となってしまった。

用瀬小学校6年生たちの発見した縄文土器数10点は、余井古墳の南及び東周辺約100mの範囲を主としている。このあたりを余井遺跡とした。縄文時代後、晩期のすり消し縄文及び条痕文をつけた土器片で、中には鉢形の口縁部と考えられるものも含まれている。

また、昭和54年3月約1km下流、千代川と赤波川との合流により形成された沖積地上の鷹狩遺跡の北西部(字大前附近)で縄文土器(条痕文)2片ではあるが表面採集した。

この度のこの余井遺跡、鷹狩遺跡は千代川中流での縄文土器出土という新事実を示すこととなった。なお、同じ縄文遺跡の畑遺跡が石棒出土地(県立博物館蔵)として千代川水系の佐治川上流(用瀬で合流)、佐治村畑で発見されており、あわせ考えれば、千代川中上流域での縄文

人の生活を想起させるものとして貴重である。

弥生時代については、余井古墳発見以前、地元余井部落の安東寛氏は、古墳周辺で数点の弥生土器を収集されていることが最近わかった(現在は町教委保管)。弥生後期の無頸壺、台付壺が含まれている。余井古墳南周辺で、炭化物の附着した甕等が黒褐色腐植土層に押しつけられたように附着しており、安東氏の土器等のことを考えれば、住居跡等があったのではないか。

また、鷹狩遺跡の北部で甕や磨製石斧(扁平刃石斧)も収集した。

古墳時代の周知の遺跡として位置が明確にされていたのは、鷹狩1号墳・2号墳、古用瀬1号墳・2号墳の4基の古墳であった(ひすい、用瀬町誌、故里もちがせ)。

そのうち、3基は、工事により発掘され、昭和30年発掘された鷹狩1号墳の遺物は現存(用瀬小学校保管)し、昭和32年工事の古用瀬2号墳の発掘当時の写真数枚(入江有憲氏蔵)が残るのみで、遺物は行方不明である。昭和9年発掘の古用瀬1号墳については、遺物等の伝承のみで他については不詳である。町内の古墳は、余井古墳を含めて5基の円墳であり、そのうち4基は横穴式石室であることがわかり、遺物のわかる3基については、出土品からして、6世紀後半のものと考えられる。

古墳立地の特筆すべき問題として、5基のうち4基までが平地(現在の水田面)に築造されており、山間部の古墳のあり方として注目すべきだと考える。

また、ほ場整備事業に伴い数ヘクタールに及ぶ余井、美成、鷹狩各遺跡とも土師器の散布が最も多く、次に須恵器が見られ、このことから、古墳時代にはかなり広範囲に生活の場が発展したものではないかと考えられる。

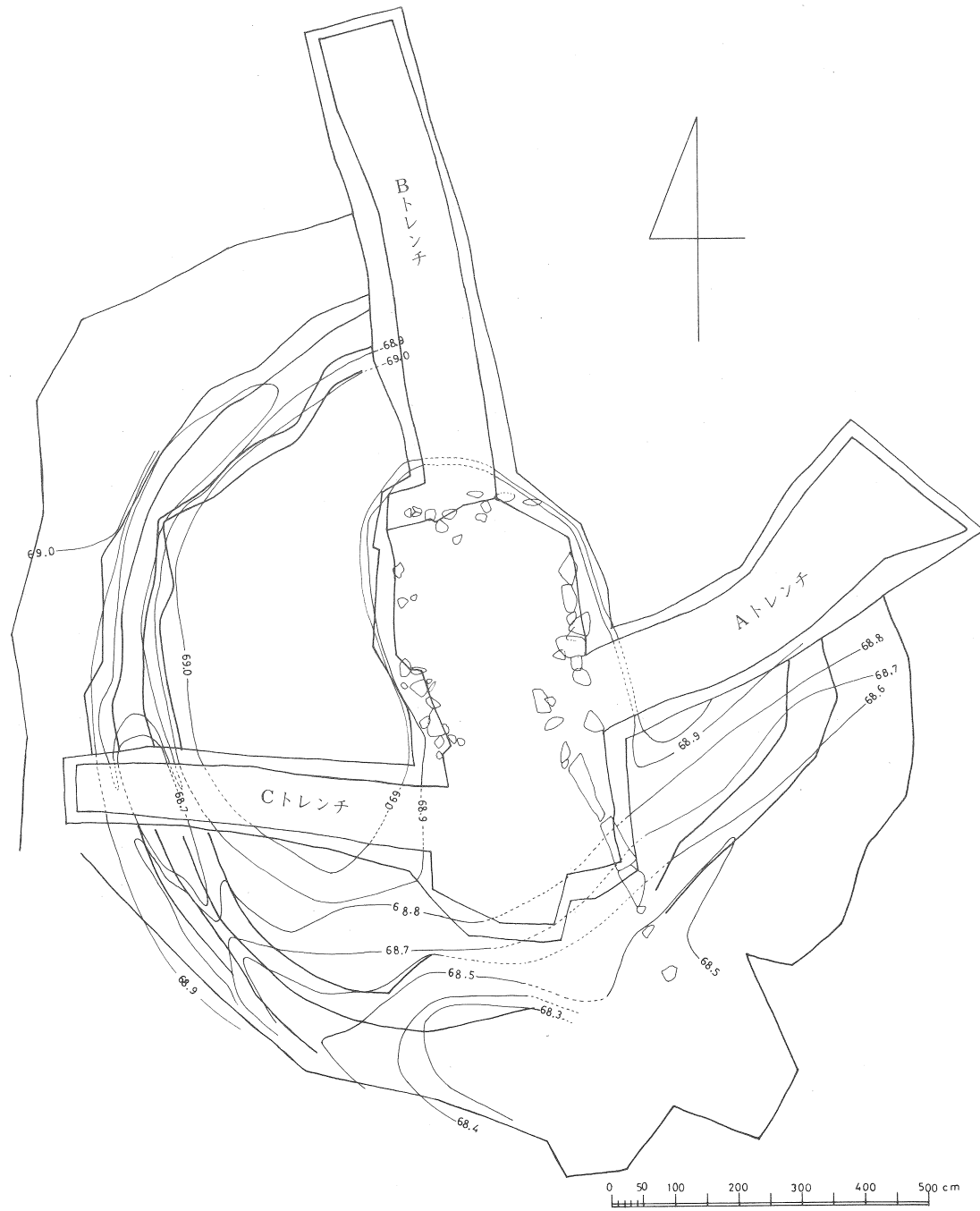
## IV 調査の経過

9月から余井古墳の遺構の調査に取りかかった。晴天続きで調査は順調に進んだ。先づ石室内の調査を始め、続いて第一より第四トレンチを掘り、第三トレンチで明確な周溝を発見した。そこで周溝ほりにかかったが、羨道前方あたりは75cmもの下の田となっている所のため明確さを欠いた。羨道前方の左右からは須恵器の壺類のたたき目文のある破片が若干発見された。約1ヶ月で遺溝の現地調査を終了した。

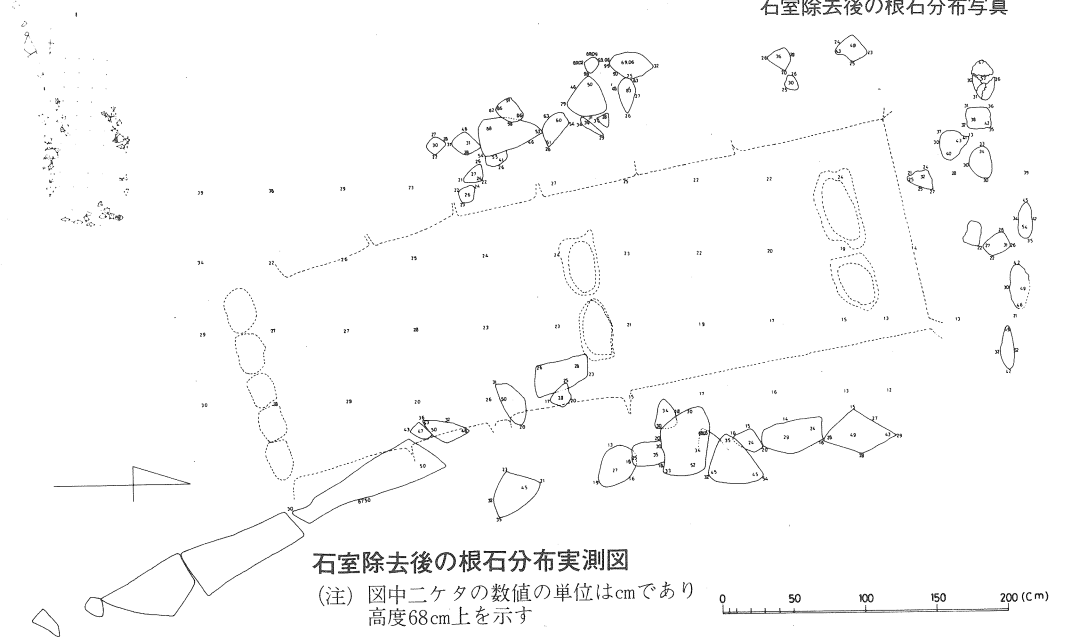
遺物の調査は10月より始めたが、土器は破損が少く完全に近いものが多かった。土器の出土点数に比して鉄器類の出土が多かった。生駒の元興寺に保存方の手入れに出した品以外に、馬具や鎌などの破片は相当数あった。装身具については調査の未熟のためか、勾玉などは見つからなかった。

玄室に使用されていた石は復元することとし、年末にセンター前に移し、近く復元することになっている。

A 遺 構  
イ 余井古墳実測図



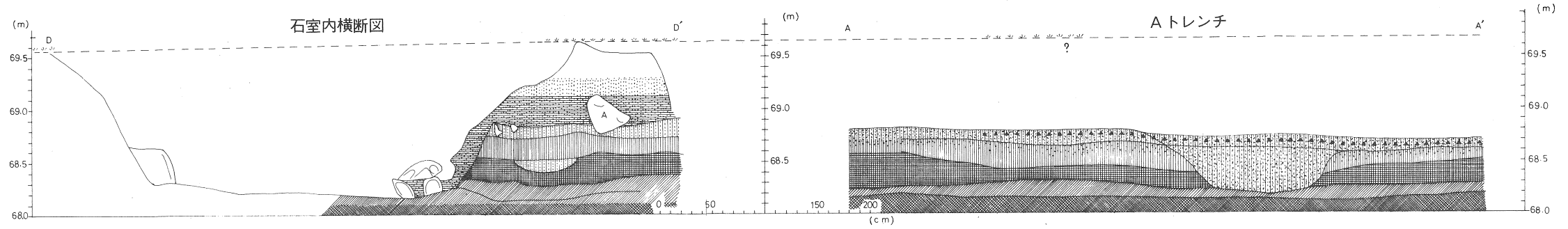
石室除去後の根石分布写真



石室除去後の根石分布実測図

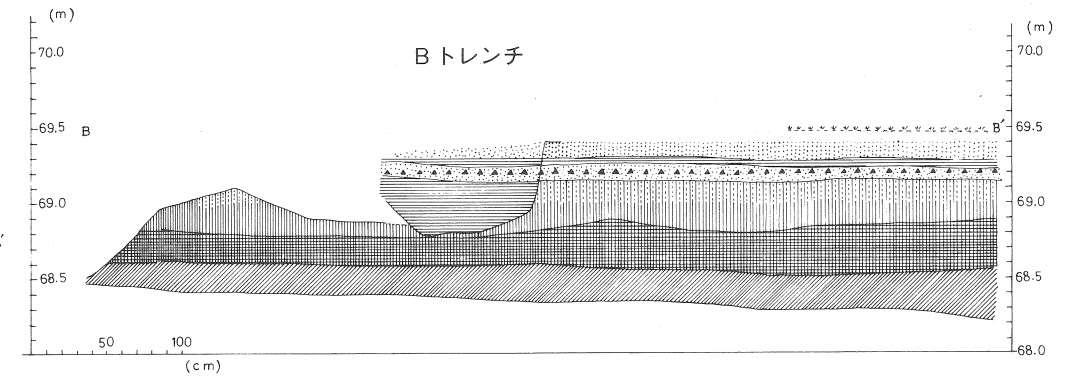
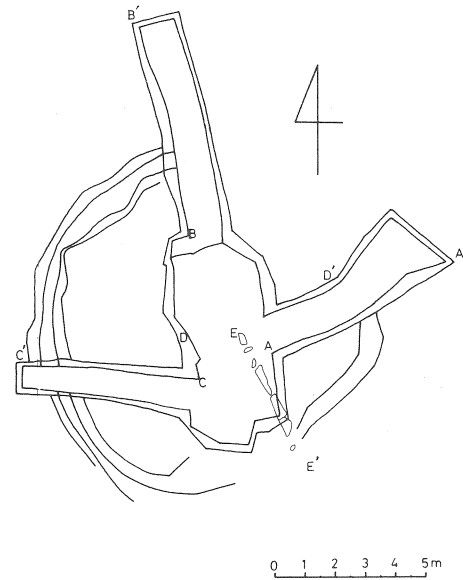
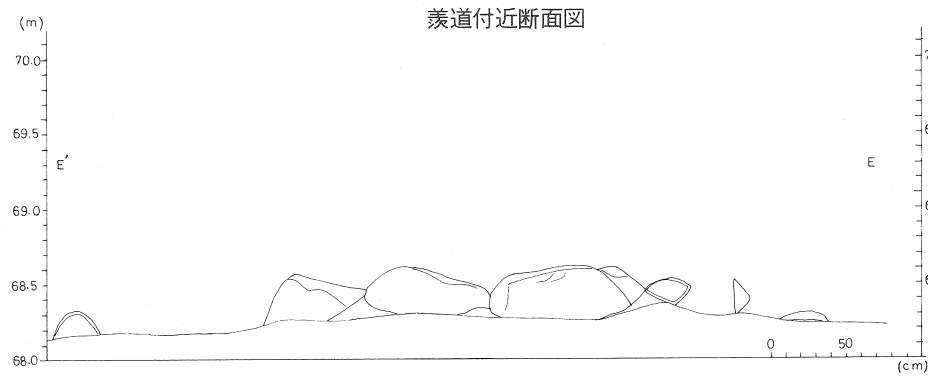
(注) 図中ニケタの数值の単位はcmであり  
高度68cm上を示す

□ 余井古墳断面図



13 (3),(5)の混合層で黒褐色を呈する  
(黒ボクの特徴を有する)

14 (3),(6)の混合層で黒褐色を呈し粘性を有する  
(黒ボクの特徴を有する)



1 耕作図

4 粗粒赤色斑点砂層(集積層)

7 小礫点在粗粒淡黄褐色砂層

10 粗粒青灰色均質砂層  
(扇状地伏流によるグライ層)

2 粗粒灰褐色砂層(溶脱層)

5 粗粒茶褐色砂層

8 小礫点在細粒淡黄褐色砂層

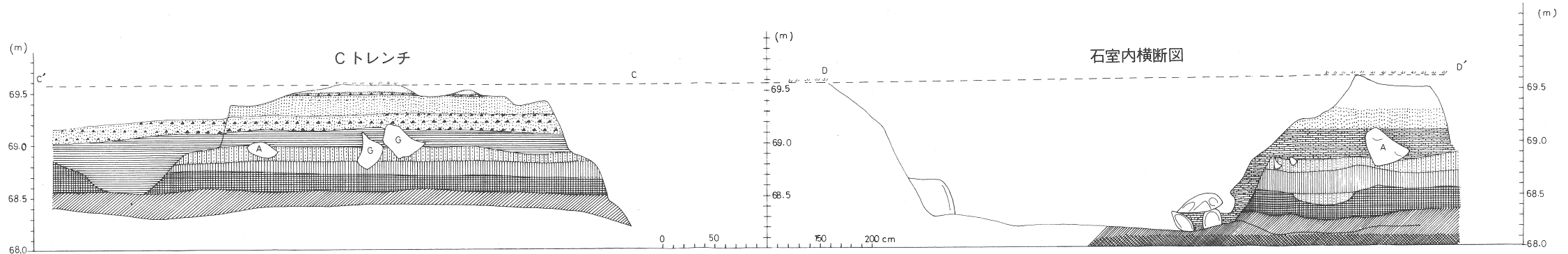
11 A 安山岩

3 粗粒茶褐色砂層(溶脱層)

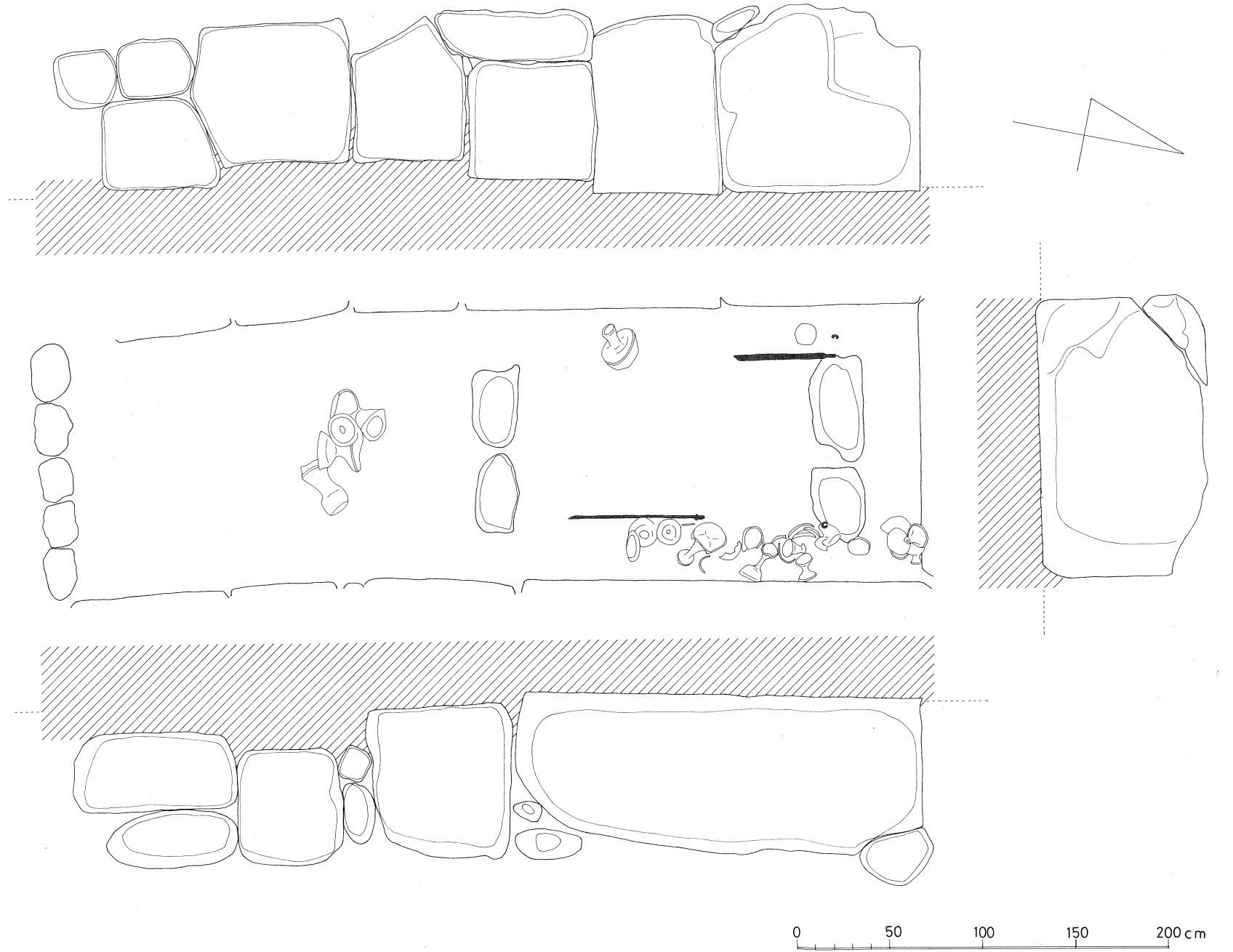
6 小礫散在粗粒淡黄褐色砂層

9 均質細粒黄褐色砂層

12 G 花崗岩



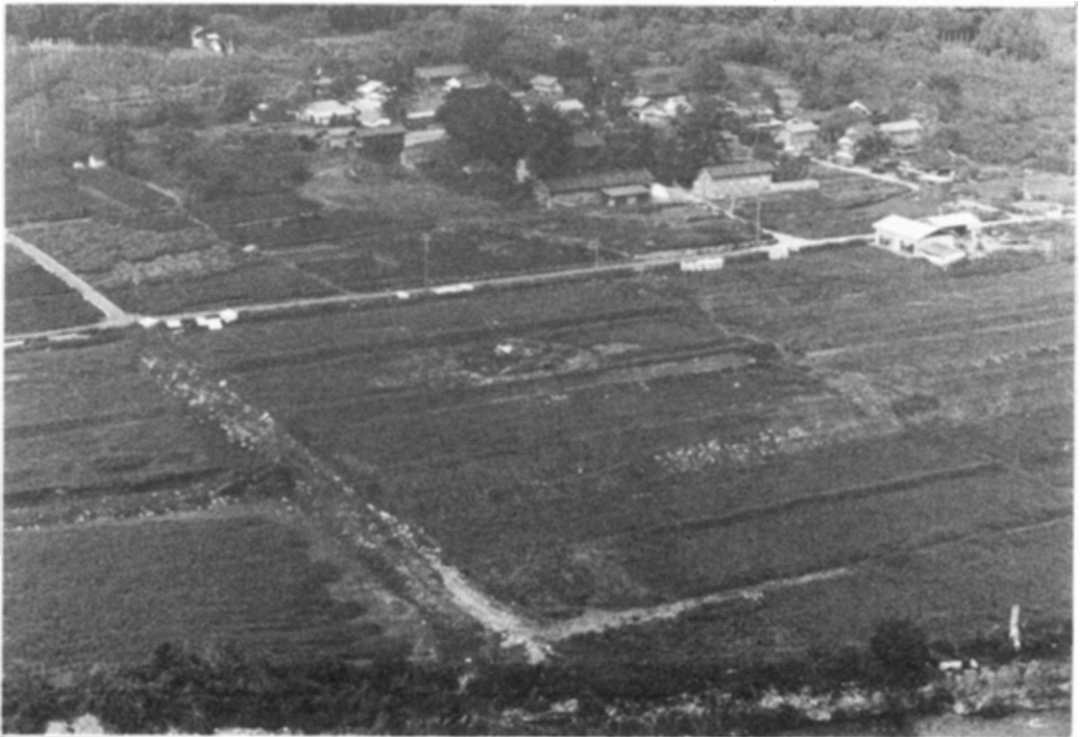
ハ 余井古墳展開及び石室内状況見取図







ほ場整備前 (1969) 12月 あたご山より



ほ場整備後 (1978) 10月 あたご山より

## B 遺 物

### 1 土 器

#### イ 石室内より出土の土器

第1表に示す通り、土器はすべて須恵器で、大部分玄室右側約60cm付近より出土した。羨道部分よりの出土は極めて少なかった。土器は比較的破損が少なかった。

器種	器形	土器番号	口径 cm	器高 cm	形 態 の 特 徴
須 恵 器	高 坏	1	14.1	11.5	口縁部やや外反 脚部下に向って広がる脚をもつ 天井部はやや不調整
	高 坏	2	14.9	12.2	口縁部外反 脚部下に向って広がる脚をもつ 天井部ほぼ水平
	高 坏	3	16.0	14.3	口縁部外反 脚部下に向って広がる 天井部不調整にて変形
	高 坏	4	14.4	8.8	口縁部外反 脚部下に向って広がる 天井部は水平
	高 坏	5	11.7	身 部 の み 5.3	口縁部ほぼ垂直 坏身中央部に一条の溝あり 脚部がない
	台 付 碗	6	10.1	9.3	口縁部やや内傾 底部はほぼ水平で安定がよい 口縁部やや傾斜、水平でない
	高 坏	7	10.1	14.1	口縁部外反 坏部中央に1本の凹線がある 底面ほぼ水平で安定がよいが半分欠けている 口縁部やや傾斜、水平でない
	高 坏	8	15.1	13.5	受部は内方へ伸び短い 底部は水平で安定がよい 口縁部傾斜、水平でない
	高 坏	9	16	11.3	受部は内方へのび短い 口縁部は水平でなく3mm傾いている 底部は水平で安定がよい 口縁部やや傾斜、水平でない
	高 坏	10	16.5	13.6	受部はほぼ垂直 口縁部は大きくわん曲している変形している 底部は水平で安定がよいが3分の1欠けている
	高 坏	11	15.4	17.7	受部やや内方に傾く 底部安定 脚部は長脚で2段透し中央部にヨコナデによる2条の凹線をめぐらしている

手 法 の 特 徴	備 考
内面は横ナデ 裏側内面はヘラけずり	色調は灰褐色 玄室出土 焼成はやや軟かい
外面は横ナデ 坏部内面及脚部内面はヘラケズリ	色調は灰褐色 玄室より出土 焼成は軟かい
外面及杯部内面上部脚部内面は横ナデ 坏部内面の底部はヘラケズリ	色調は淡灰色 焼成は軟かい 玄室より出土 脚の基底に破損 皿部6個に破損 一部なし
外面及坏部内面上部は横ナデ 坏部底面はヘラケズリ	色調は淡灰色 玄室より出土 焼成は軟かい
外面及内面とも横ナデ	色調は淡灰色 玄室より出土 中小粒の砂多し 焼成はやや軟かい
外面坏部内面上部は横ナデ 坏部底面はヘラケズリ	色調は青灰色 玄室より出土 焼成は硬い
外面及坏部上部は横ナデ 坏部底面はヘラケズリ	色調は青灰色 玄室より出土 焼成は硬い
外部及坏部内側上面は横ナデ 坏部内面底部はヘラケズリ	色調は淡灰色 玄室より出土 焼成はやや軟かい
外面及坏部内面上部は横ナデ 坏部内面底部はヘラケズリ	色調は淡灰色 玄室より出土 焼成は硬い
外面及縁部は横ナデ 坏部内面はヘラケズリ 内外面に自然釉見られる	色調は青灰色 玄室出土 焼成は硬い
外面及坏部受部は横ナデ 坏部内面はヘラケズリ	色調は淡灰色 焼成はやや軟かい 玄室出土

器種	器形	土器番号	口径 cm	器高 cm	形態の特徴
須 恵 器	高 坏	12	15.9	17.5	受部やや内方に傾く底部安定 脚部は受脚で2段透し但上段のすかしはあいていない中央部に2条の凹線をめぐらす
	高 坏	13	12.7	14.9	口縁部やや外反し少し傾いている 脚部は受脚で2段透し中央部に浅い2条の凹線をめぐらす
	高 坏	14	12.9	18.7	受部やや内方に傾く底部やや不安定 脚部は長く2段透し但し上のすかしは形のみ中央部に2段の凹線あり
	高 坏	15 A	16.0	18.3	受部やや内方に傾く、天井部は水平 脚部は受脚2段透しだが上部の透しは内部がふさいでいる。中央部に2条の凹部をめぐらす
	高 坏 蓋	15 B	14	4	受部ほぼ垂直に下がる 天井部はほぼ水平
	高 坏	16	15位	13.4 位	口縁部やや外反 口縁部及底面とも大部分欠けている。従って器口径は不分明
	高 坏	17	14.5	12.6	口縁部やや外反 基底の大部分破損
	高 坏	18	11.6	10.7	口縁部やや外反 坏身上部内面中央部は平たん 坏身上部外面の中央よりやや下は一段張り出している 坏身上部の半分は欠損 たち上りより中央部に2条の漏をめぐらしている
	甗	19	14.8	17.6	口頸部はラップ状に広く開く 口縁はやや水平を欠く 頸部の中央に2本身部のふくらみの中央よりやや上に2本の凹部をめぐらす 底面はやや不安定
	甗	20	14.5 位	17.8	口頸部ラップ状に広く開く 口縁部はやや不調整でわん曲している 底面はほぼ水平であるが不調整にてやや不安定 口頸部中央に2条、身部中央よりやや上に2条の凹部をめぐらす
	提 瓶	21	7.6位	17.8	口頸部やや広がり漏斗状 体部肩部に提瓶の取手の跡の飾りをつける 口頸部半分以上欠けている
	提 瓶	22	7.2	23.0	口頸部漏斗状で外向に広がっている 全体的に形は整然としている安定もよい 口頸部は楕円形 体部肩部に取手の跡の飾りをつける
提 瓶	23	9.6位	27.8	口頸部漏斗状に上向きに広がっている 全体的に形は整然としていて安定もよい 身部裏面はやや中央がくぼんでいる 口頸部の口縁部半分以上欠けている	

手 法 の 特 徴	備 考
外面及受部は横ナデ 坏部内面はヘラケズリ	色調は淡灰色 焼成はやや軟かい 玄室より出土
外部及坏部内面上部は横ナデ 坏部内面底部はヘラケズリ	色調は青灰色 焼成は硬い 玄室より出土
外面及坏部上部は横ナデ 坏部内面底部はヘラケズリ	色調は青灰色 焼成は硬い 玄室より出土
外面及坏部上部は横ナデ 坏部底面はヘラケズリ	色調は青灰色 焼成は硬い 玄室より出土
外面及内部縁は横ナデ 内面天井部はヘラケズリ	色調は青灰色 焼成は硬い 玄室より出土
外面及坏部上部は横ナデ 坏部底面はヘラケズリ	色調は淡灰色 焼成は軟かい 玄室より出土
外面横ナデ 坏部内面はヘラケズリ	色調は青白色外面の $\frac{1}{3}$ 白色の斑点あり 焼成は硬い 玄室より出土
外面及坏部上部は横ナデ 坏部底面はヘラケズリ	色調は青灰色 焼成は硬い
内面及外面底部を除き横ナデ 外面身部半分より下はヘラケズリ 内外面に自然釉が見られる	色調は白灰色外部の $\frac{1}{3}$ は黒色 焼成は硬い 玄室より出土
口頸部は内外面とも横ナデ 身部上半は横ナデ下部はヘラケズリ 口頸部上部に斜の2段のヘラがき沈線を入れている 肩部に1条凹線	色調は灰色 焼成は硬い 玄室より出土
口頸部は内外面とも横ナデ 体部は同心円のカキ目、裏側はヘラケズリ頸部は横ナデ 外面の $\frac{1}{3}$ は青白色の自然釉あり	色調は暗灰色 玄室より出土 焼成は硬い 中粒砂多し
体部外面表側は整然とした同心円のカキ目 裏側はヘラケズリ 頸部は内外とも横ナデ	色調は灰色 焼成はやや硬い 玄室より出土
体部上半身は同心円のカキ目が見られるが、ヘラで消されているところがある。下半身及底部はヘラケズリ 頸部は内外とも横ナデ	色調は灰色 焼成はやや硬い 玄室より出土

器種	器形	土器番号	口径 cm	器高 cm	形態の特徴
須 恵 器	壺	24	8.5	21.3	口頸部漏斗状に上向きに広がっている 耳部中央よりやや上に2条の沈線をめぐらし、沈線の上に波状文をめぐらして その上に1条の沈線をめぐらす 口頸部中央に2条の沈線をめぐらす 底部は凹凸があって不安定
	甕	25	14.6	15.9	口縁部外反 体身部は球形、そのため底面は凸状となり不安定
	坏蓋	26	14.9	4.8	口縁部やや外反 口縁部の一部欠け
	坏蓋	27	14.9	4.7	口縁部やや外向 口縁部の一部欠け
	坏蓋	28	14.9	4.8	口縁部やや外向 口縁部の一部欠け 天井部ほぼ水平
	坏蓋	29	15.4	4.9	口縁部やや外向 天井部やや凸出
	坏蓋	30	12.9	3.9	口縁部やや外向 天井部はやや傾斜
	坏蓋	31	15.0	4.4	口縁部ほぼ垂直 天井部はほぼ水平であるが中央凹み
	坏蓋	32	15.1	4.7	口縁部やや外反 天井部はやや凸出
	坏蓋	33	14.6	3.6	口縁部やや外反 天井部に近いがやや傾斜
	坏蓋	34	14.7	4.1	口縁部垂直 天井部中央くぼみ
	坏蓋	35	13.9	4.9	口縁部やや外向 天井部はやや凸出

手 法 の 特 徴	備 考
<p>身部上部及頸部内外面は横ナデ  身部下部及底部はヘラケズリ  外面の大部分に緑色の自然釉あり</p>	<p>色調は釉のあるところは  緑色他は灰白色  玄室左入口より出土  焼成は硬い</p>
<p>体身部の外面はけ目  内部口縁部はヨコなで、体身部は右上方向のヘラケズリ</p>	<p>色調は上部は黄褐色、中部以下はすず  焼成は軟かい  玄室内より出土</p>
<p>内外面とも身部は横ナデ  天井部は内外面ともヘラケズリ</p>	<p>色調は灰白色  焼成は軟かい  玄室内出土</p>
<p>内外面とも身部は横ナデ、天井部はヘラケズリ</p>	<p>色調は灰白色  焼成は軟かい  玄室内出土</p>
<p>内外面とも身部は横ナデ、天井部はヘラケズリ</p>	<p>色調は灰白色、但し外面底部は暗褐色  焼成は軟かい  玄室内出土</p>
<p>内外面とも身部は横ナデ、天井部はヘラケズリ</p>	<p>色調は淡灰色  焼成はやや軟かい  玄室より出土</p>
<p>内外面とも下部は横ナデ、であるが天井部はヘラケズリ</p>	<p>色調は青灰色  焼成は硬い  玄室より出土</p>
<p>内外面と体部は横ナデ、天井部は内外ともヘラケズリ</p>	<p>色調は外部青灰色、内部褐色  焼成は硬い  玄室より出土</p>
<p>内外面とも体部は横ナデ、天井部はヘラケズリ</p>	<p>色調は青灰色  焼成は硬い  玄室より出土</p>
<p>内外面とも身体は横ナデ、天井部はヘラケズリ</p>	<p>色調は青灰色  焼成は硬い  玄室より出土</p>
<p>内外面とも身部は横ナデ、天井部はヘラケズリ</p>	<p>色調は淡灰色  焼成は硬い  玄室より出土</p>
<p>内外面とも身部は横ナデ、天井部はヘラケズリ</p>	<p>色調は青灰色  焼成は硬い  玄室より出土  外面きは黄白色の斑点あり</p>

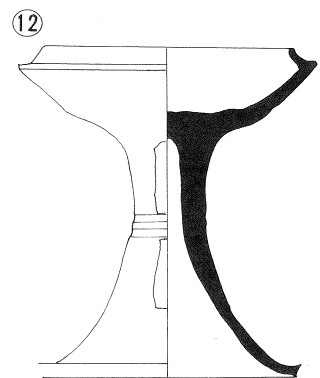
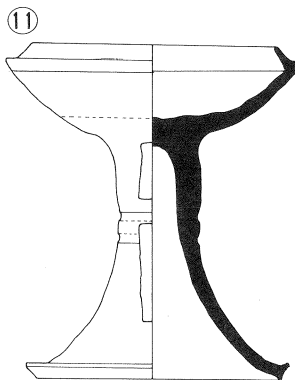
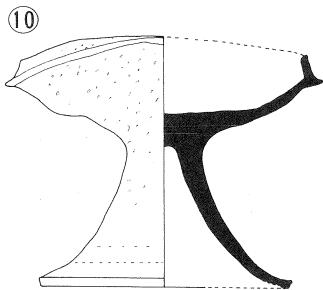
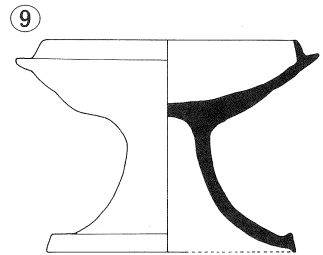
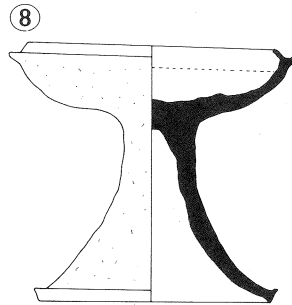
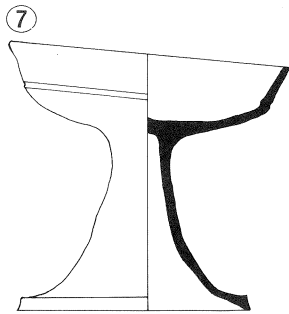
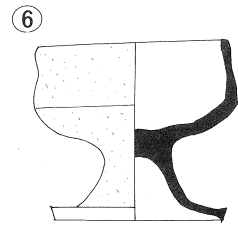
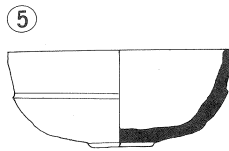
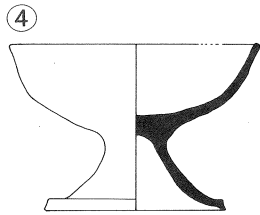
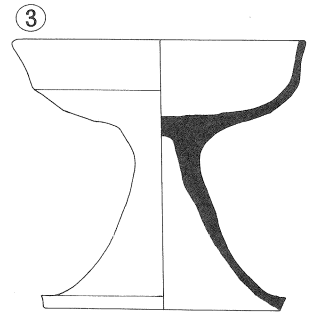
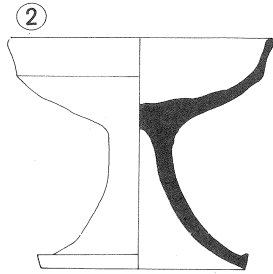
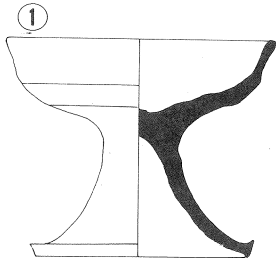
器種	器形	土器番号	口径 cm	器高 cm	形態の特徴
須 恵 器	坏蓋	36	14.6	3.9	口縁部やや外向 天井部ほぼ水平
	坏蓋	37	14.8	4.4	口縁部やや外向 天井部は水平
	坏蓋	38	11.4	3.5	口縁部やや外向 天井部は水平
	坏蓋	39	14.3	4.3	変形しているため楕円形をなし反っている。口端部は内傾している 底部は中央がへこんでいる
土 師 器	壺の蓋	40	14.3	8.8	口縁部やや外向 一部破損 3コに分れている
	小型頸壺	41	5.7	9.8	口縁部ややだ円 底部凸部となっているため不安定 胴中位がそろばん玉状にふくらむ
	台付壺	42	不明	10位	大部分がこわれているため器高、口径など不明



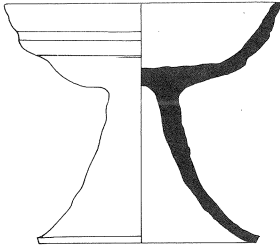
手 法 の 特 徴	備 考
内外面とも身部は横ナデ天井部はヘラケズリ	色調は青灰色 焼成は硬い 玄室より出土 外面 <sub>キ</sub> は白色の自然釉 内面 <sub>キ</sub> は赤色顔料
内外面とも身部は横ナデ天井部はヘラケズリ	色調は青灰色 焼成は硬い 玄室より出土
内外面とも身部は横ナデ天井部はヘラケズリ 身部と天井部の境界に1条の凹線をめぐらす	色調は淡褐色 焼成は硬い 玄室より出土 外面 <sub>キ</sub> は白い斑点あり 外面底部の一部は朱色
内外面とも上部は横ナデ底部はヘラケズリ	色調は表灰白色である 内面の半分は黒色 外部の周辺半分には黒緑色の 斑点あり 玄室より出土
上身部外面は10条余りの横の条痕 脚部には縦の条痕 内外とも朱	色調は内外とも朱色 焼成はやや軟かい 余井古墳北東50mの田より 以前に出土
外面上半はなでた上にヘラミガキ下半はヘラケズリのあとナデ 内面はヘラケズリ	色調は赤褐色 焼成はやや軟かい 余井古墳北東50mの田より 以前に出土
外面は浅い縦の櫛けずり 内面は縦横斜のはけ目調整 外面には朱を塗っている	色調は朱色 焼成は軟かい 余井古墳北東50mの田より 以前に出土

イ 土 器

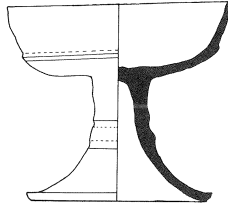
1 石室内より出土の土器



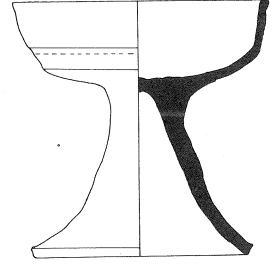
17



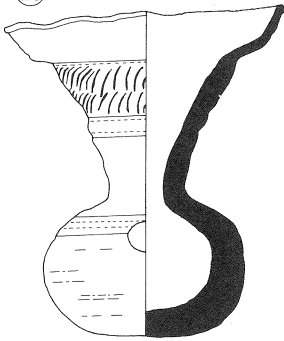
18



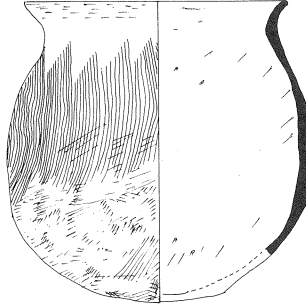
16



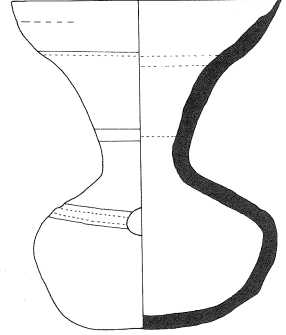
20



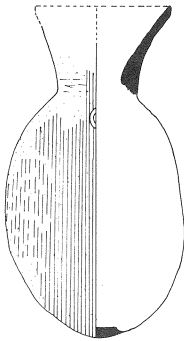
25



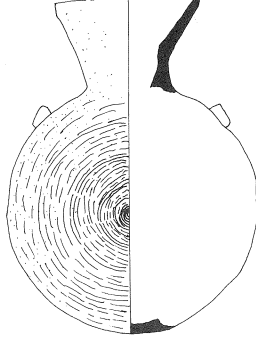
19



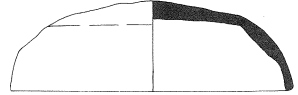
21



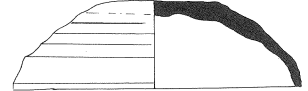
21



26



27



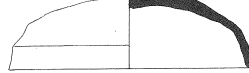
28



31



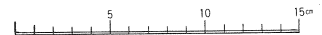
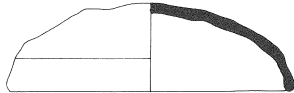
30

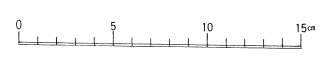
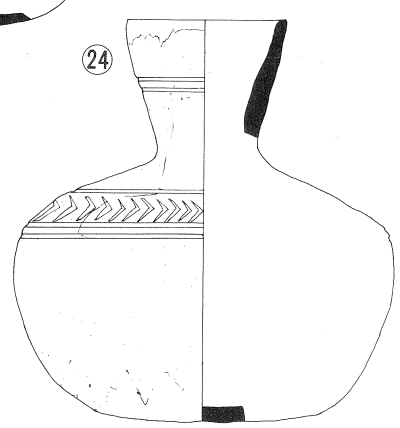
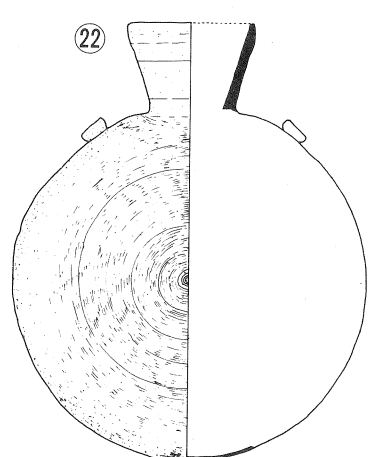
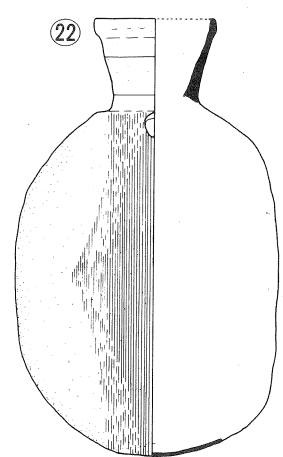
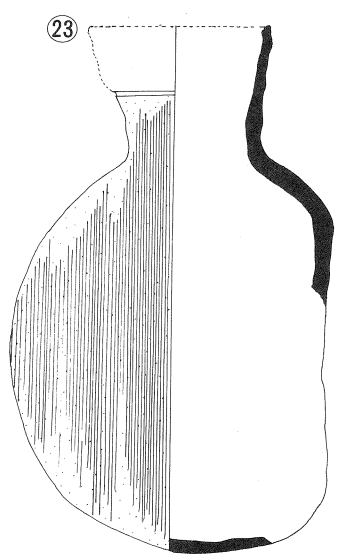
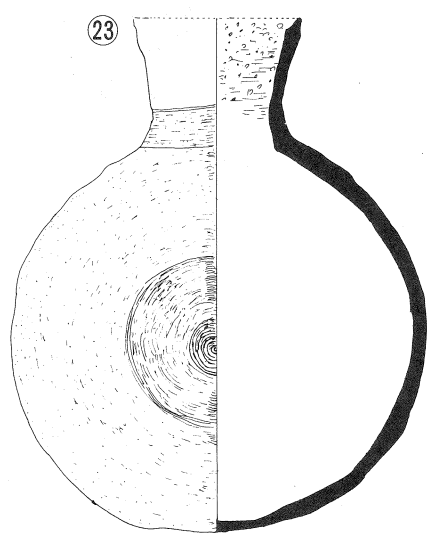
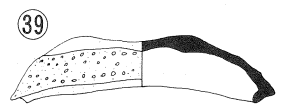
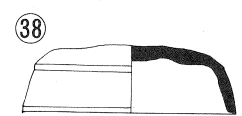
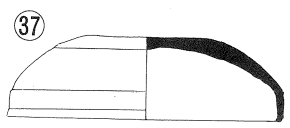
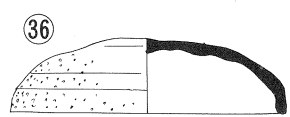
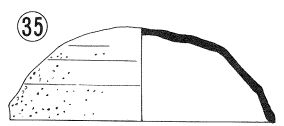
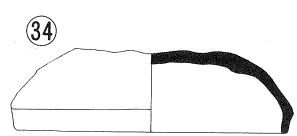
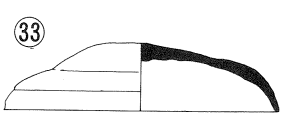


29



32



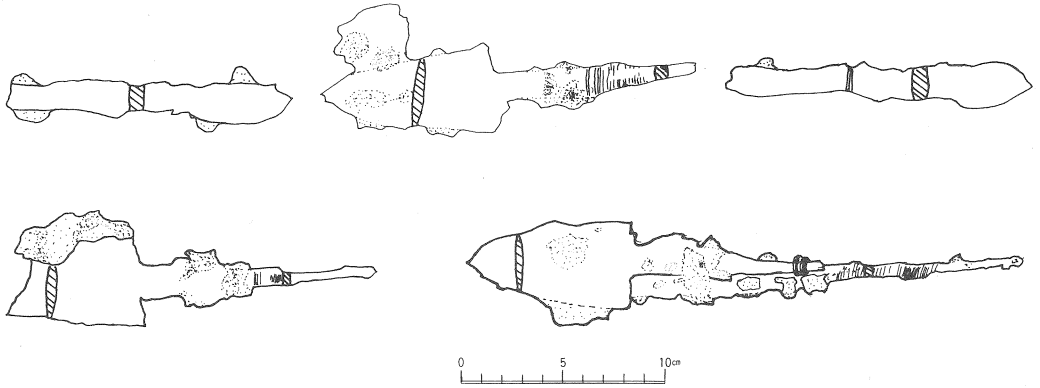


## 2 鉄器

鉄器類の出土が可成り見られた。鍬、馬具らしき破片が相当数ある。

鉄器類の主なもの、馬具、おの、長短刀、鎌、鍬であった。

鍬 $\frac{1}{2}$



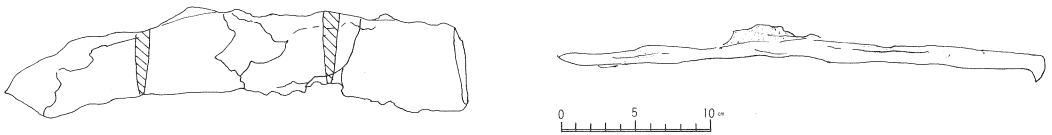
刀子



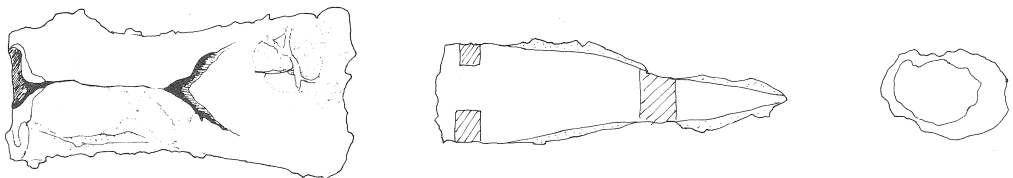
馬具



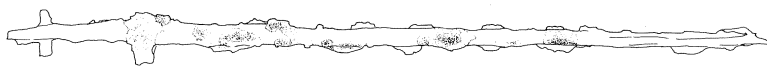
鎌



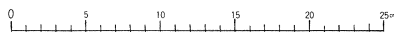
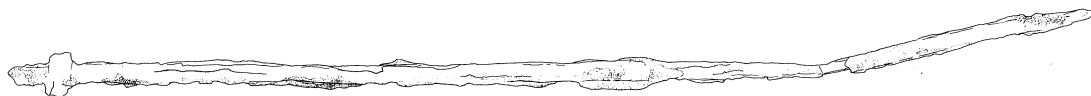
おの



刀 短刀

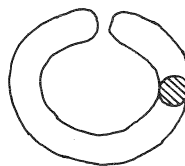
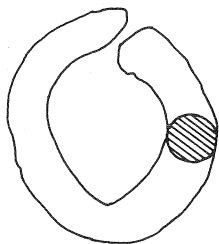
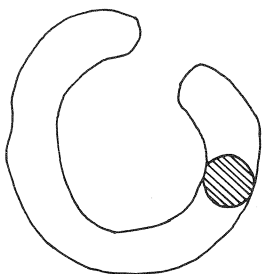


長刀



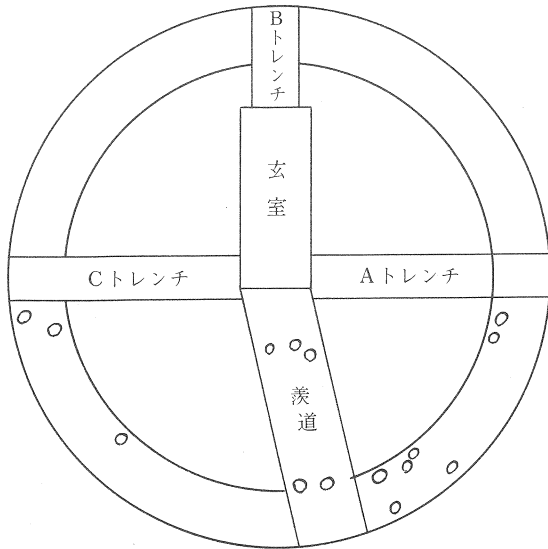
### 3 装身具 (原寸大)

耳飾り 4 個、何れも玄室内より出土 実物大

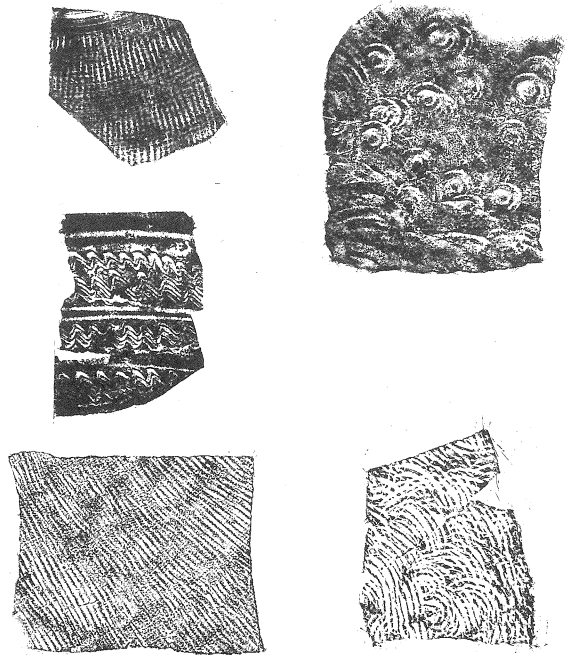


#### ロ 周溝よりの出土品

周溝よりの出土はすべて破片で、羨道に近い部分に集中していた。その主なものは甕の一部分で、青灰色、焼成は硬く、破片の弯曲より推定すると、口径30cmもあるものもある。



(周溝内出土概念図)

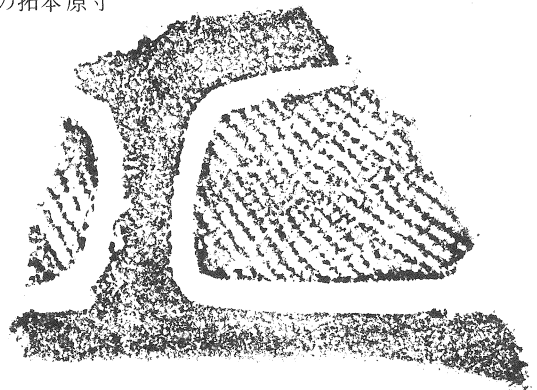
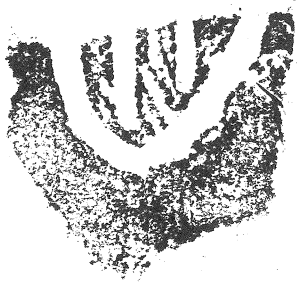


#### ハ 周辺より出土品

##### a 余井古墳上みより

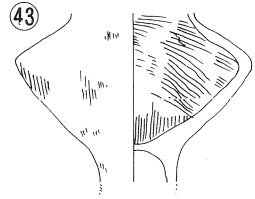
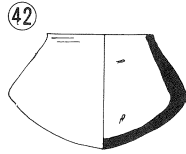
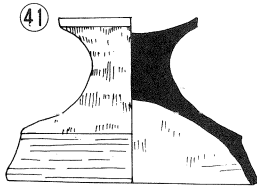
余井古墳上み半径100m余の間より、余井古墳付近の新旧圃場図2) 多数の須恵器、それに土師器も可成り見られ、稀に縄文土器まで見られた。

縄文土器の拓本原寸



b 余井古墳下も

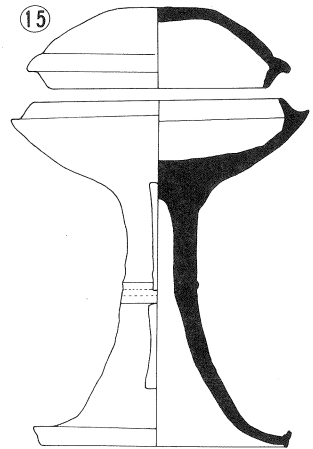
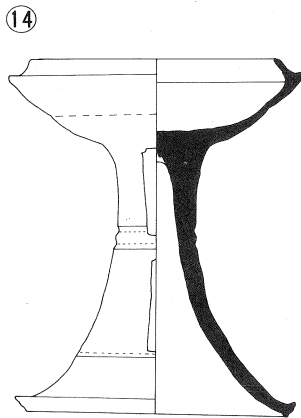
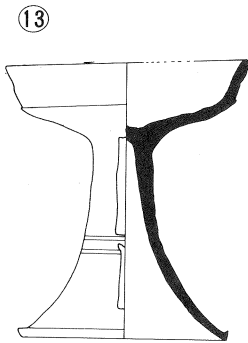
余井古墳下も50m余の田の中（余井古墳付近の新旧圃場図1）より一覧表の40～42の土師器  
が出土している。



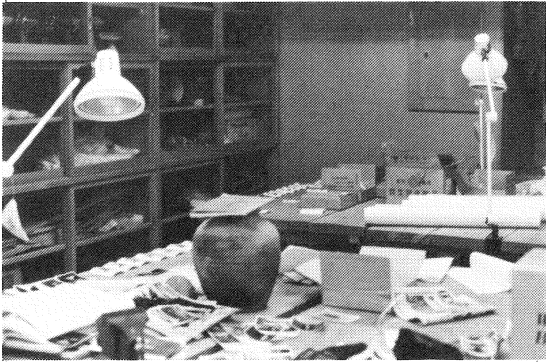
c 余井部落の上み

須恵器を主体とし、土師器も若干加わった土器の破片が多数発見される。

しかし a b c のあたりには、今の所古墳らしきものは見つからない。







事後処理の状況



第3トレンチの作業

15



16



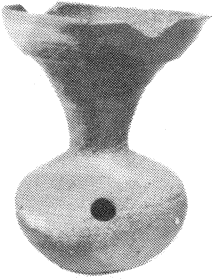
17



18



19



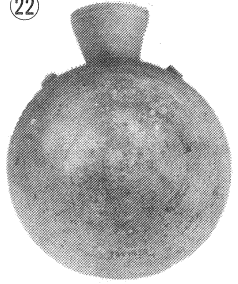
20



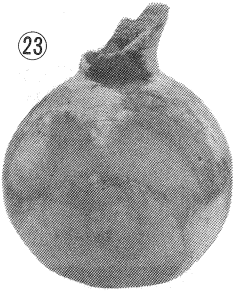
21



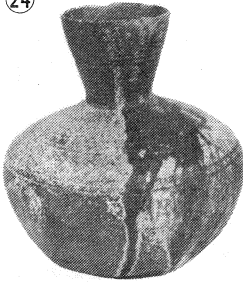
22



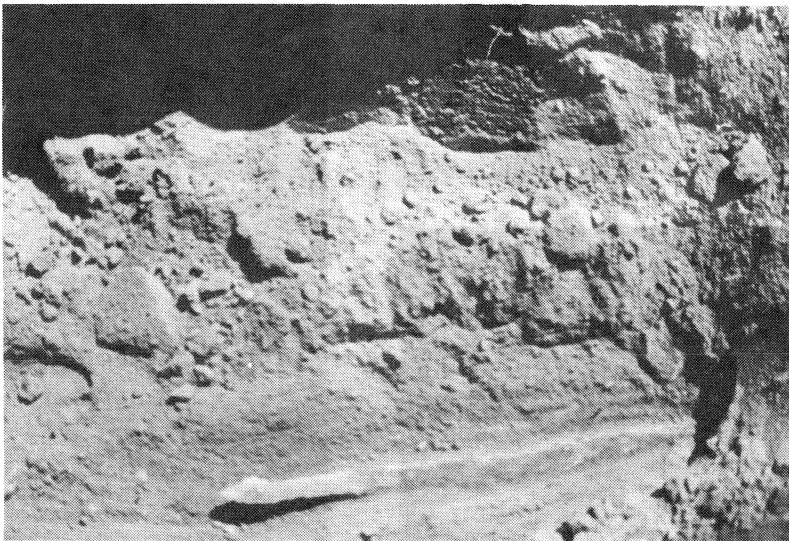
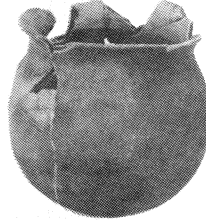
23



24



25



玄室内より長刀出土

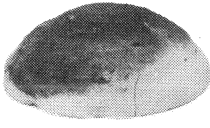
26



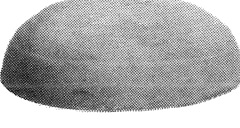
27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



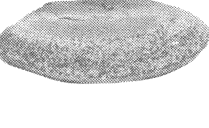
37



38

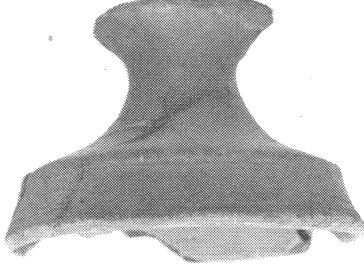


39

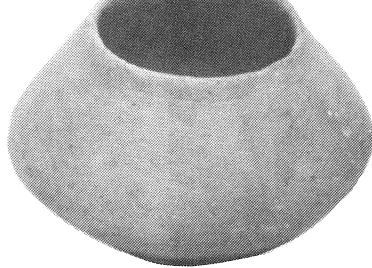


発掘終了時の状況

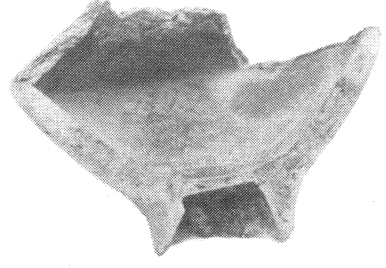
40



41



42





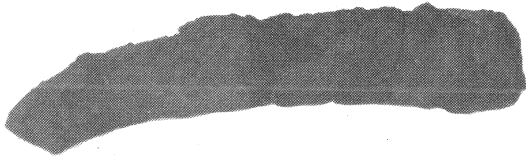
石室側石除出後の状況



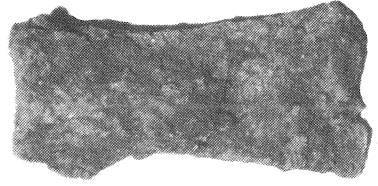
周溝発見



玄室内状況



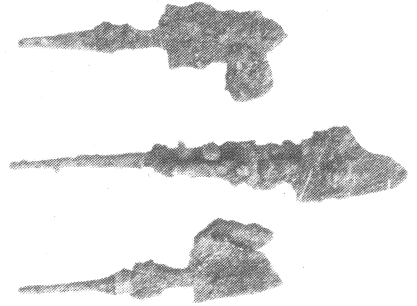
鐵 鎌



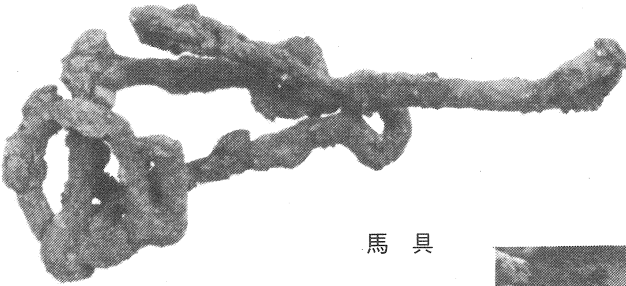
鐵 斧



鐵製品



鐵 鏃



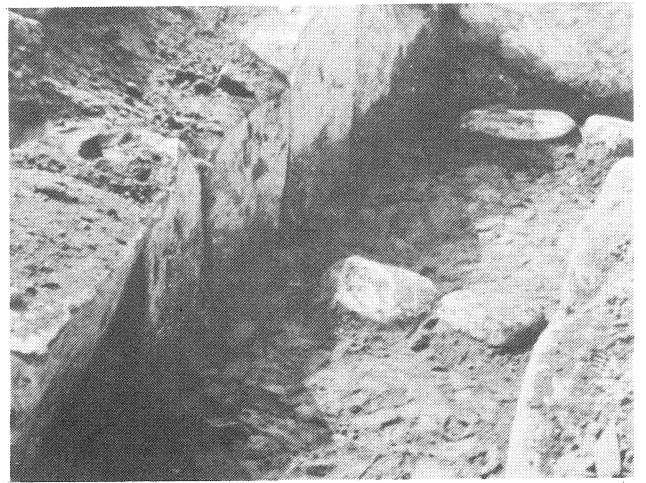
馬 具



短 直 刀



長 直 刀



石室内の枕石



古墳類

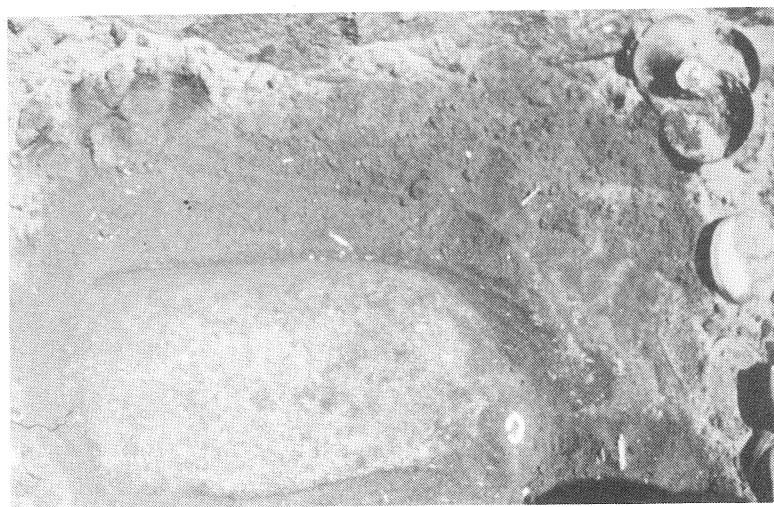
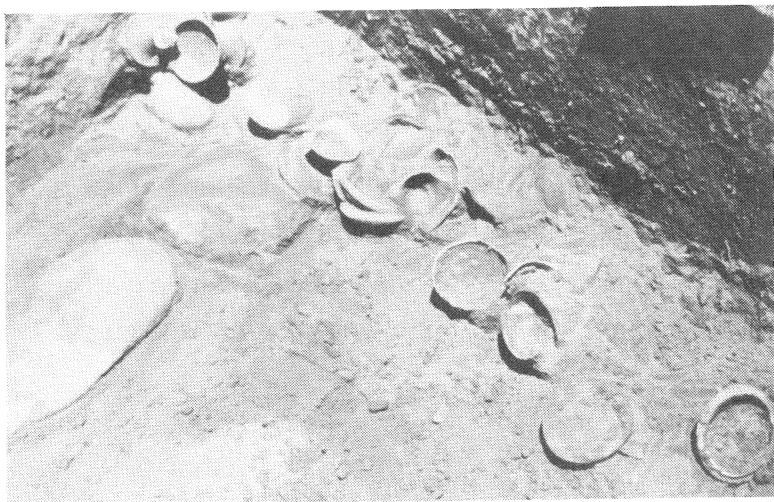


羨道より見た石室



石室の構造分明

石室内での出土状況



## V ま と め

余井古墳はその出土品から見ると、古墳時代末期のものと考えられる。

この古墳の特色として第一に挙げるものは、至近距離に千代川があるにもかかわらず、石室に用いた石は、鷹狩1号墳では川石を用いているに反して、後方の山の花崗岩を利用していることである。恐らく川より上げるより、山から下した方に搬出で便であったためではないだろうか。

又石室の蓋石が見られなかった。これはもともとこの地は墓地であって小山になっていた。その山の上に一本の大きな木が生えており、あたり一帯は竹が茂っていた。しかしここを田に開拓するために、墓地を山麓に移転し、木や竹を伐り取って、小山をならし田に変換したのだと古老が語っているところから見ると、田にする時に蓋石が出て、邪魔となったので、こわして持ち去ったのではないかと思う。

第二の特徴は、鷹狩1・2号墳と同じく、千代川の氾濫原の真只中に存在することである。恐らく当時はこの地方では住民が少なく、未開墾地が随分あったのではないだろうか。

第三に付近一帯から須恵器、土師器を主体とする土器の破片が多数見られ、余井部落より山麓にかけては特に多く見出されているのみならず、鷹狩1号墳千代川よりの田からも、須恵器、土師器の土器の破片はあったが、余井古墳では少数ながらも、縄文土器の破片があったことである。こうして見ると、余井古墳のあたりは、可成り古くより、古墳が作られていた所ではないだろうか。



## あ　と　が　き

昨年8月7日余井古墳発見以来、発掘作業に1ヵ月半、引き続いてその整理にあたって来たが、未経験の上に浅才のため手間どおり、53年度も、も早や幕を閉じようとする今、漸くの思いで、発掘調査のすべてを終ることが出来ました。この間発掘にあたって、文化財保護委員の方、中村教育委員長、又献身的な助けをいただいた松下利秀さん、更に公私多忙を極めているにもかかわらず、終始御指導をいただいた県文化課の森田純一先生、これらの方々の御協力によって、今日を迎えたことが出来ましたことを、厚く感謝する次第です。

省みて猶不十分な点、特に発掘時の軽卒な実測には深く反省しています。せめて今後この研究調査は幕を閉じることなく、猶幾多の問題を残す余井部落周辺の研究を進めねばならないと考えています。又今後起り得る基盤整備に伴う古墳の取扱いには、このにがい経験の上に立つて善処したいと考えています。

担当責任者 野 上 博記